

## 特 別 講 演

### ヴェルサイユ宮殿—バロック芸術の華—

神戸大学 文学修士 池 上 忠 治  
文学部教授

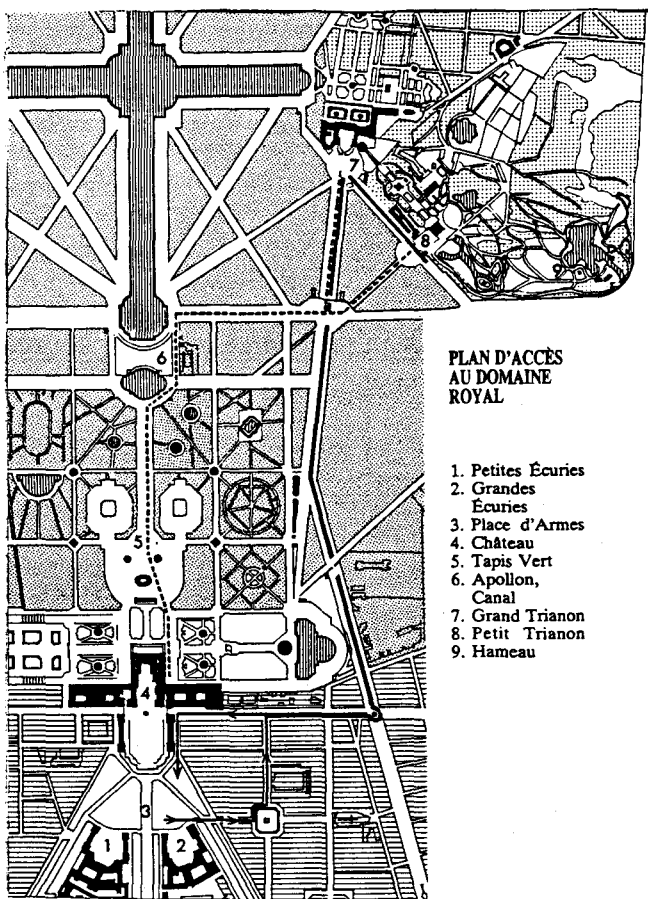
Chuji IKEGAMI

ルイ 13 世の治世のころ、つまり 17 世紀前半、ヴェルサイユは何の変哲もない村でしかなかった。たまたま王はこの村の近辺に狩猟に来ることを好み、簡素な館を作らせた。石と煉瓦とからなる建物の特色は今も“大理石の庭”に面する部分に残っている。

次いでフランス王となったルイ 14 世は、古い館を豪華な宮殿に変えようと決意する。建築家はル・ヴォー、造園家はル・ノートル、そしてインテリアの一切を取りしきるのは宮廷の首席画家ルブランである。1660 年代のことで、ここでモリエールが各種の芝居を演出・主演したこともあった。さらに同王の治世の後半に“鏡の間”が完成し、礼拝堂も造営された。今日も見られるヴェルサイユ宮の主要部分は 18 世紀初頭に完成したと言えよう。

ヴェルサイユ宮殿はバロック芸術が諸分野一体となって作りあげた至上至高の華であり、ブルボン王朝の絶頂期を象徴するものでもある。だが、強権的な力が常に最高の芸術を養成するとはかぎらない。ルイ 13 世からルイ 14

世への過渡期に、王権とは必ずしも関係のないところで、フランスの古典主義が結実しつつあった。つまりデカルトとバスキルに代表される哲学、コルネイユとラシーヌの悲劇＝文学、そしてプッサンの絵画である。このことはまた他方で、近世フランスの豊かさと多様性を示すものとも言えよう。



ルイ 14 世の時代からフランス革命にいたるまで、ブルボン王朝の宮廷はこのヴェルサイユ宮殿にあった。その豪華壮麗な生活ぶりは各国の外交官団によって次々と本国に伝えられ、スペイン、プロイセン、バイエルン、ロシア等の宮廷も競ってヴェルサイユを手本としながら宮殿経営につとめ、フランスから建築家や画家、彫刻家等を次々と招きよせる。

フランス革命以後にも、宮殿は改造と手直しとをほどこされる。とりわけルイ・フィリップの『歴史美術館』が重要で、ドラクロアの手になる「タイユプールの戦い」と「十字軍のコンスタンチノープル入城」はこの企画によって実現された“近代絵画”として重要である。

宮殿中で最も有名なのは“鏡の間”で、ルイ 14 世の時代以来、重要な儀式や祝宴のほとんどすべてはここで取り行なわれた。普仏戦争に勝ったプロイセン王フリードリヒがドイツ皇帝を宣言したのも、第一次大戦を終結させるヴェルサイユ条約が調印されたのも、同じくこのスペースにおいてであった。

ここではスライド映写をしながら、主として歴史と美術の視点からヴェルサイユ宮殿を振りかえってみたい。

PLAN GÉNÉRAL  
DU CHATEAU

